



自然—自ずから

なるもの—

自然再生推進法を批判する

ミジンコ研究者・余市町

石田 昭夫

自然という言葉は自ずからのという形容詞に状態を示す接尾語の然が付いたものだから、言うなればほったらかしておくとなるものである。広辞苑にはおのずからそうなるというさまとある。国会に議員立法で自然再生なんか法案が上程されるのに対し北海道自然保護協会から反対の意見が出ていた。反対理由の一つに、かつての公共事業で改変されてしまった場所も年月のうちにそれなりの落ち着いたものになっているの

でそれをまた名目を変えた公共事業でかき回す必要はないことをあげている。あらゆる自然は年月の内にその趣を変えていくもので、いくら人がその特定の状態を人工的に作り出そうと思っても不可能である。それ故、年月が作り出したものを大事にするということは決定的に重要であり、保護協会の主張は当をえている。石狩川の蛇行部分が自然あるいは人為的に短絡されて生じた三日月湖例えば宮島沼などは今ではかけがえない自然となっている。札幌から二七四号線で帯広に向かう途中、石狩低地帯を走る直線部分の道路脇に水路が走っている。この国道が作られ、水路が掘削された当時は剥き出しの土肌だったであろう岸辺は多様な草本、木本植物に覆われ、所謂生物の多様性は満足できるものに見え、それは動物相についても言えそうである。これ等はいずれも低湿地で、人為を加えた後も地下水位の変動が僅かだった所である。そういう所は放置によりもとの自然に回復する可能性が高い。一方、このような所は

殆どが農耕地などに改変されてしまっているので、元の自然が残らない。自然保護運動がこういう自然の保存に努力されることを望むものである。

それに対し、オホーツク海沿岸などは年間降水量が少なく、一度木を切ってしまうと元の状態に復元することは困難な地域である。私は一九四八年から一九五〇年にわたり北見網走を中心に多くを過ごし、その後一九七〇年代は草地造成が河川生物に与える影響の調査と、魚道設置場所選定の仕事、八〇年代以降はライフワークのミジンコの類いのカイアシ類の採集で、この地域の自然の改変されるのを胸が痛くなる思いでつぶさに見てきた。半世紀前までこの地域に残されていた自然は今何もない。海岸に向けて櫛の歯のように並び直線化されコンクリブロックで護岸された剥き出しの水路はせめて布団をかけてやるように河畔林をこさえてあげればと思う。ニュージランドの南島にテアナウという国立公園があり、湖と川が境界となつて周囲の牧草地と隔てられている。公園

内は南極ブナの深い原生林で十分に湿った林床には苔に覆われた倒木が横たわり、僅かな水たまりにさえ驚くほど多くの種のカイアシ類が高い密度で住んでいる。一方、境界の外はからつと乾燥した土壌に牧草が育ち、カイアシ類がいるような環境は絶無である。その対比はかつてのオホーツク海沿岸の自然と現在のその地域の景観のそれとに殆ど一致する。数年前、琵琶湖の近くの名神高速の工事ですでに大きな窪地に水が溜まり年月の内に見事な景観と動植物相を具えた池になったものを調べたことがある。自然再生を云々するなら、空いた土地や河川敷にブルドーザーで水が溜まるような穴を掘り、近所に川があればそれとつながる細い水路をこさえて欲しい。余計なこととは一切せず、あとは放置するのである。土地以外は殆ど費用がかからない。三十年たつたら確実に皆が納得するものができている。しかし、これでは役所も土建屋も金がかからないが故に絶対に取り上げないだろう。